

RINGADAWN 〈リングアドン〉

妖精姫と灰色狼

あやめゆう

Yu Ayame

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶ (次ページ) をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵
挿画

BUNBUN
平面惑星

目次

| | | |
|------|------|-----|
| 序幕 | 御伽の国 | 11 |
| 第一幕 | 灰色狼 | 39 |
| 幕間 | | 69 |
| 第二幕 | 傭兵 | 79 |
| 幕間 | | 105 |
| 第三幕 | 明主 | 113 |
| 幕間 | | 133 |
| 第四幕 | 従者 | 137 |
| 第五幕 | 陰謀 | 155 |
| 第六幕 | 戦 | 173 |
| 第七幕 | 影 | 197 |
| 幕後 | 妖精の牙 | 231 |
| あとがき | | 243 |



フランド・シュービット

シグリエル・リム・ロント

レイジ・クォルトリーズ

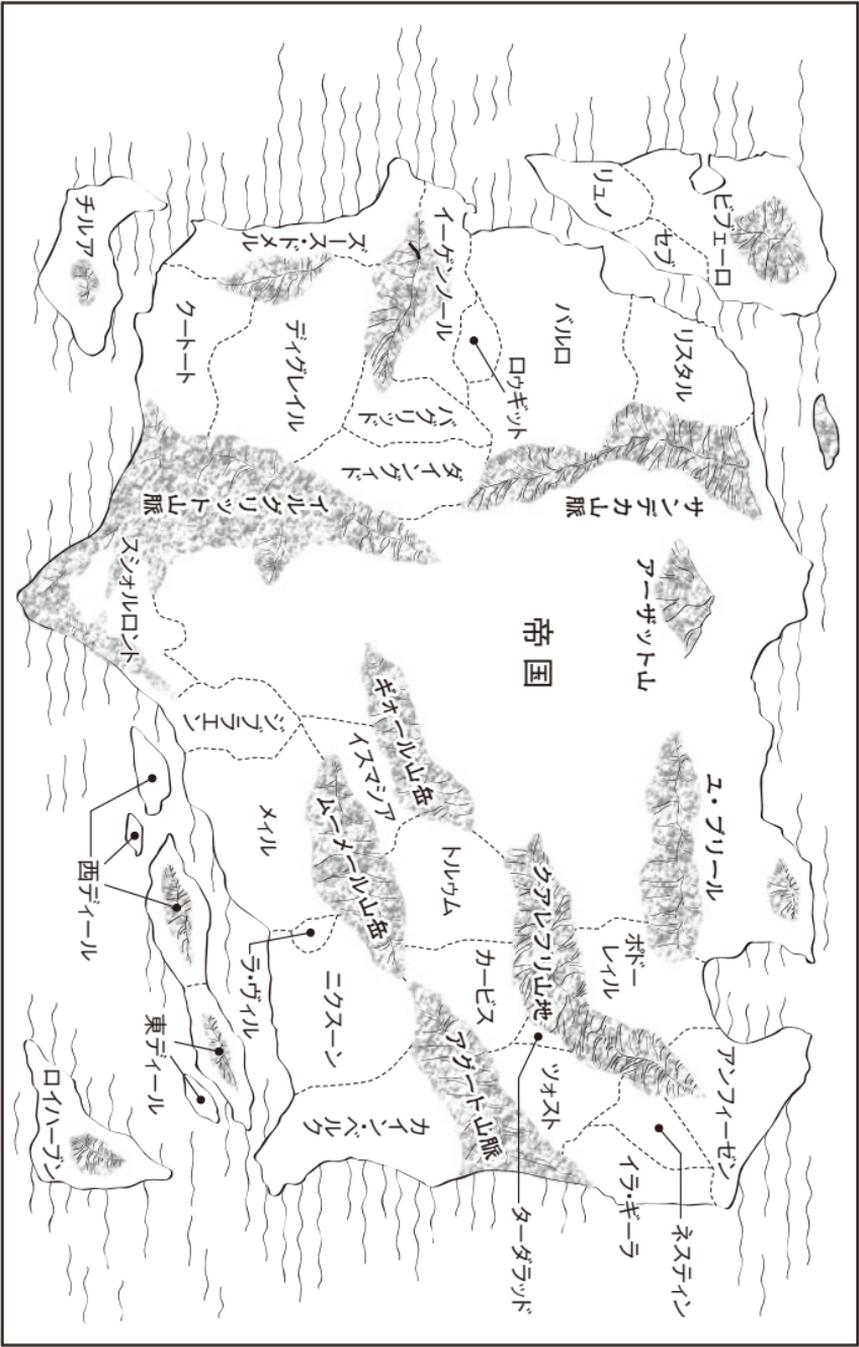
オーズ・ザースティ

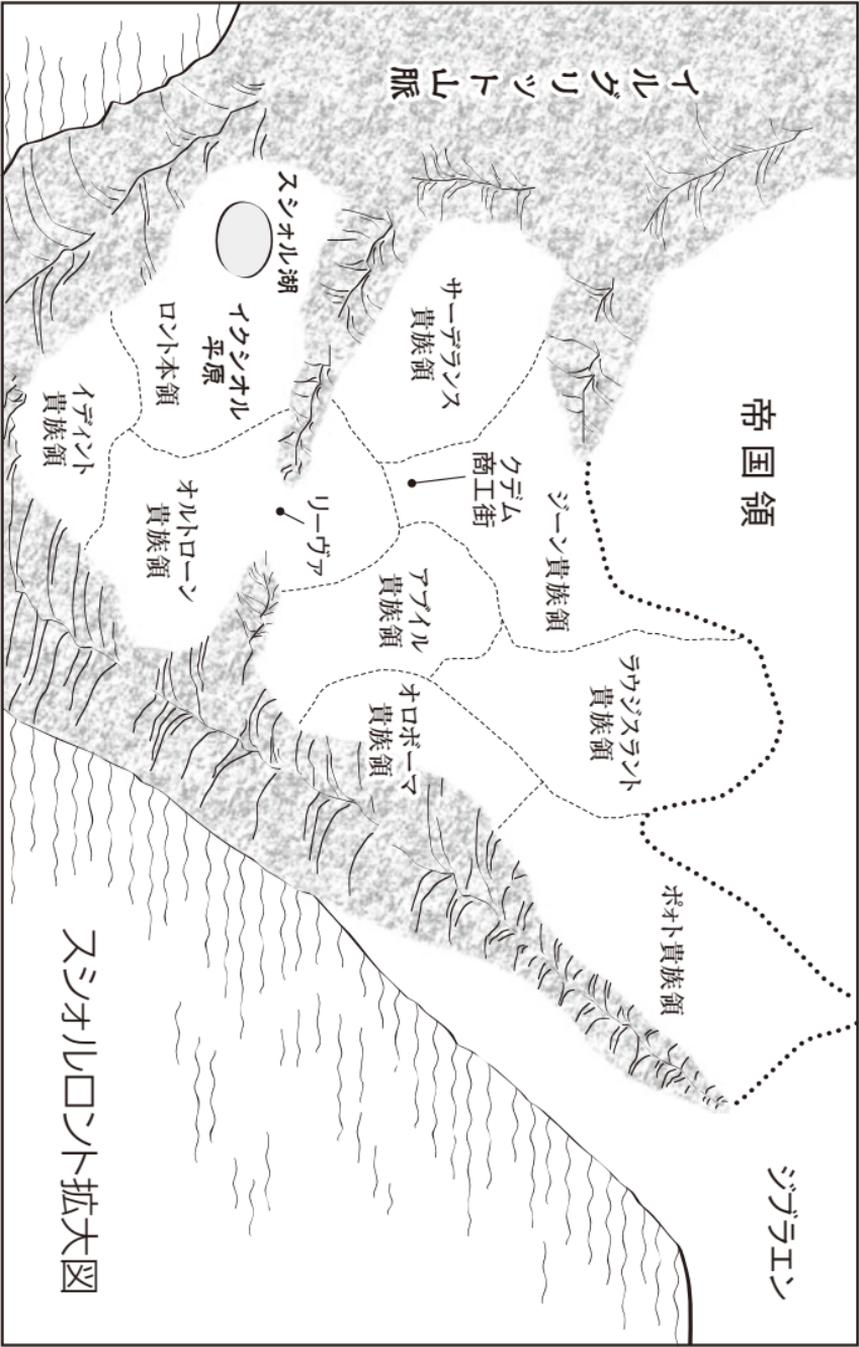
ミスリウル・
リム・ジーン

アムルアント・
リム・ジーン

ユベイル・カーグン

バームング・オールドウ





イェルグリット山脈

スシオル湖

イェシオル
平原

ロント本領

イェイント
貴族領

オルトローン
貴族領

リーヴァ

アブアル
貴族領

オロボーン
貴族領

サーデランス
貴族領

クテム
商工街

ジーン 貴族領

ラウジスラント
貴族領

ボオト 貴族領

帝国領

ジグラエン

スシオルロント拡大図

リンガドゥン
RINGADAWN

妖精姫と灰色狼



序幕
御伽の国

TENDER MEMORIES FROM THE PAST

きらきら光る湖を
ゆらゆら泳ぐ妖精が
ひとりぼっちでそこにいた

きれいなきれいな湖に
きれいなきれいな妖精が

あるとき騎士がやって来て
叫ぶふたり、出会ったの

きらきら光る妖精に
一目惚れした騎士様は
その手をそっと差し出して
その手がぎゅっと握られた

きらきら光る湖で
ゆらゆら揺らぐときのなか
子供の子供がうまれても
ひとりぼっちでそこにいた

きれいなきれいな湖に
きれいなきれいな妖精が

その身をそっと投げ出して
わたしをずっとだきしめて

スシオルロントは妖精郷

叫ぶふたり、出会ったのは
今は昔の物語

1

妖精郷の城下町には、石畳が続いている。

街の端からスシオル湖まで。石畳はロント城に向かつて伸びていないので、この街で最も重要なのはスシオル湖だとも言わんばかりの街づくりだが、何しろ古い国なので、「どうしてそんなふうに？」という疑問はあっても答えはない。

レイジ・クオルトリーズは大陸の北東側、クアレフリ地方からスシオルロントに越して来てもう半年経つが、未だに石畳の道を歩いたことはなかった。

それは、彼が裏町の子供だからだ。

母親は娼婦であり、暮らしている家は娼館のすぐ近くにある寮のような古い建物だ。娼婦といつても貴族相手の高級娼婦ではなく、町民相手の商売であるから、暮らしが豊かであるはずもない。レイジはまだ子供だったけれど、娼館の女将おかみの紹介で配達の

仕事を任されていた。母は昼に家事をして夜に働き、朝方眠る。レイジは昼間に荷物を抱えて裏町を歩き回り、夜には疲れきって泥のように眠った。

妖精郷と称されるこの国は、きつと貧困とは無縁な豊かな場所なのだろう——レイジは越して来るまで、半ば本気でそう思っていた。けれども住んでみれば、それまで暮らしていたクアレフリの片田舎とそれほど変わりなかった。妖精郷だろうが中央の大国だろうが、飢えと貧困のない場所はない。

平和なのに奇妙なものだ、とレイジは思う。

何処どこにだって金持ちの貴族はいて、その百倍以上の貧民がいる。その階級構造についてレイジはそれほど深く考えたことはなかったが、やはり奇妙だといふ思いは消えない。飢えや貧困は人を狭量にするし、それはレイジもよく知っている。しかしだからといって金持ちが心広いとは思えない。持つ者は他人を迫害する、というのがレイジの実感だった。だから、貧乏自体はそれほど苦でもなかった。

そもそも、暮らしていける金銭があるうちは貧窮とは言えない。母親もそれなりに笑って暮らしているし、娼館の娼婦たちも同様だ。レイジ自身はあまり笑わなかったけれど、それはともかく。

越してきてから半年、貧しくはあったがそれなりに平和で穏やかな暮らしだった。

だからその日、配達の仕事が午前のうちに終わってしまつて、ふと石畳の向こうまで行つてみようと思つたのはどうしてなのか、後になつて考えてもレイジには思い出せない。

ただ、なんとなく石畳を歩いてみようと思つた。

レイジの住む裏町からスシオル湖まで、行つて帰つて来ても半日掛からない。行つてみようかなと考へたとき、否定するだけの理由は思いつかなかつた。表通りは華やかで、賑やかだった。

石畳をずっとまっすぐ歩いててもロントの城には辿り着かないので、城下で一番栄えているのはスシオル湖よりかなり手前だ。

貴族の住む街区、ロント城へ続く道、富裕層の町民が住む街区、それらのちよつど溶け合う場所が、いわゆる『市』になつている。人や物であふれるその通りは、けれどレイジの興味をあまり刺激しなかつた。誰かが浅黒い肌と黒い髪の子供を珍しがつて見てきたが、一切構わず歩き続けた。

まるで運命に呼ばれるように——ふらふらと。

何処かで鐘が鳴っている気がしたが、これもほとんどレイジの気を引かなかつた。それが昼を知らせる鐘であると知つたのは、かなり後になつてからだ。

市を抜けると、石畳の両脇から建物が減ってくる。そのまま進んで行くうち、不意に空が広がつた。石畳が微妙な坂になつていて、いつの間にか頂点に着いたのだ。呆れるほどきれいに晴れた青空と、坂の下に見える澄んだ湖。石畳の脇にはもう建物がほとんど見えず、背の低い草原が湖まで続いている。

陽射しを受けてきらきら光るスシオル湖が空の青色を映し、景色いっぱい蒼と光が溢れている。

妖精郷。

その言葉が思い浮かんで、レイジはぼんやりと納得した。そう、ここが妖精郷なのだ。ここには確かに妖精が住んでいたのだろう。そうでなければ、どうしてこんなにきれいなのか。

けれど——どうしてだろう、なんだか寂しいような気がするの？

そう思ってから、そう思えるような理由が見当たらないことにレイジは気付いた。眼下に広がる青空と湖、遠くにはロント国を囲む雄大な山岳があり、妖精郷と呼ばれるに相応しい景観だ。なのに何か、欠けている感じがするのは何故だろうか。

そのまま、レイジはほとんど何も考えずに足を動かす、坂道を下った。誰もいなかったし何もなかった。目の前に広がる湖が——おそろしく澄んだ湖が、どんどん大きくなっていく。湖面が光を反射して輝いているのはつきり見えてくるにつれ、胸の内にじわじわと感動のようなものが込み上げてきた。そ

して先程のよく判らない感慨の意味が、湖畔に辿り着いてようやく理解できた。

ある地点を越えた美しさは、寂寥を内包するのだ。もちろん幼いレイジが具体的にそのような言葉で考えたわけではない。ただ、そういうものだとして理解したのだ。野犬の群れが雄々しいとか、焼けた鉄に触れたら大変だとか、そんな判りやすさで。もちろん、それが全てではないだろう。もっと他の理由があるような気がしたが、まだレイジには判らない。

ほとんど惚けたような調子で、レイジはふらふらと湖畔を歩き続けた。湖畔の砂は粒子が細かく、一歩進むたびに、さりっ、さりっ、と音がした。

空の青、さらさらと光を反射する湖面、やわらかい砂。御伽の時代に妖精が住んでいたという湖畔を、レイジはまるで夢を見るように歩いて、

——ぱい、んと。水の跳ねる音で、我に返る。

音源に目を向けたレイジは、自分が本当に我に返ったのかを疑う羽目になった。

何故ならそこには妖精がいたからだ。



妖精の名前はシグリエル・リム・ロントという。御伽噺おとぎばなしを起源とするこの国で、『妖精』とはその時代の第一王女を指す言葉だ。

ごく近いわずかな者は彼女をリエルと呼ぶが、生まれた頃から一緒にいる侍女のフランデ・シユービットは「様」を忘れることはないし、彼女をリエルと初めて呼んだ母親はとくに亡くなっている。護衛騎士のオーズは、騎士としてはかなり型破りな性格ではあるが、さすがに愛称で王女を呼んだりしない。父とはそもそも顔を合わせる機会が少ない。彼女を愛称で呼ぶのは、だからジーン家の兄弟が一番機会が多い。兄のアムルアント・リム・ジーンは快活で気位が高く、妖精姫にも物怖じはしない。弟のミズリウルは優しい性格をしていて、シグリエルが愛称で呼んで欲しいことを察しているようだ

った。二人はロント国領の北側にあるジーン貴族領の領主の息子で、将来的にシグリエルの花婿候補となる可能性が高い。二人が頻繁にロントへやって来るのはそういった政治的意味合いが強いからだ。幼い彼女や彼らにはあまり関係なかった。

妖精姫には対等な友達がいなかったから、彼らは絶好の遊び相手だった。

城の裏手はスシオル湖に通じており、歩いてすぐの場所に彼女たちの『秘密基地』はある。

それは半分だけ湖に体をつっ込んだ小型の帆船だ。どういう加減でそうなったのかをリエルは知らないが、生まれたときからその半分沈んだ船はあり、物心付いた頃には遊び場にして使っていた。無論、一国の王女の遊び場だ、船体は頑丈に補強され、内部もしっかりと手を加えられている。

退屈を感じたとき、リエルはよく『秘密基地』へ向かった。その場所がとても好きだった。

この日は暖かかったので、リエルは昼の鐘が鳴っ

てからアムとミズリーを誘って湖に泳ぎに出た。ただし湖で泳ぐのはリエルだけで、アムとミズリーは湖に入らない。スシオル湖で泳ぐことは、ロント国民にとつてちよつとした禁忌である。何しろそこは、御伽斬の妖精が身を投げた湖なのだから。

上質の絹を身体に巻き付けただけの格好で、澄んだ水を掻き分ける。水に浮かんで陽光を浴びていると生の充実が感じられて気持ちいい。そんなふうに泳ぐシグリエルを、アムとミズリーは湖畔で眺めている。侍女のフランデと護衛騎士のオーズはそこからやや離れた位置で待機しているようだったが、一緒にいればいいのに、とシグリエルは思う。

いつもならアムはオーズを誘って剣技の練習などをするし、ミズリーはリュートとかいう弦楽器を弾いたりしているのだが、この日は珍しく兄弟が並んで何事かを喋っているようだった。

水面から顔を出し、フランデやオーズは何をしているのだろうかと周囲を見回すと、シグリエルの

視界に奇妙なものが写った。

少年だ。

みすばらしい服装の、浅黒い肌と、この地方ではまず見ることはない黒い髪の少年だった。

黒髪の少年は、夢でも見ているような顔でシグリエルを見ていた。

——深い、黒い瞳。

「誰？ どうしてここにいるの？」

妖精の胸に湧いたのは、子供じみた不快感だった。この場所は自分たちの遊び場で、ずっと他の誰もやってこなかった場所なのだ。

ある意味で神聖な場所を、自分たちだけの場所を見知らぬ誰かが歩いている。そのことがただ単純に不快だったのだ。

「フランデ！ オーズ！ 誰かいるわ！」

だからシグリエルは従者の名を呼んで、異邦人を何処かへやってもらおうと思った。

しかし——そんなふうにするべきではなかった。

妖精の声音には、拒絶と不快がはつきりと含まれていた。黒髪の少年はほんやりとシグリエルを見ている。深い、黒い瞳。何か——言語で表現し得ない何かシグリエルの感性を刺激したが、それが何なのかを考えている暇はなかった。

アムラアントが妖精の声に反応して駆け付け、黒髪の少年を殴り倒したからだ。

「この野郎！」

走りこんで顔面に一発。黒髪の少年は、どうしてもアムの拳を避けなかったように見えた。二人はもつれながら倒れて、少年は地面に転がったまま、立ち上がらずに身体を丸めた。アムは立ち上がり、少年の背中を何度か蹴った。

「おまえ、何だ、何処の誰だ！ この野郎！ 一体誰に断ってここに来た！」

少年の肩や背中に打撃を加えながらアムは叫んだ。もしかすると、彼もリエルと同じように思ったのかも知れない。この場所に入られて不快だ、と。

「兄さん、やめなよ。彼が何をしたっていうのさ」

「僕らが遊んでいる場所にやって来た。このみすばらしい子供が。それが悪い」弟の制止に首を振り、アムは続けた。「何のつもりでここに来た？ ここはおまえのような子供が来る場所じゃないぞ」

詰問に、少年は答えない。当然といえば当然で、アムが肩や背中へ打撃を与え続けている。少年は身体を丸めて、頭や腹を守っているようだった。

「姫様！ リエル様！ 御無事ですか!!」

水辺からフランデがシグリエルを呼んだ。オーズもとつくにアムの後ろあたりに立っている。

不意に——ぞっとした。

自分があの少年を、あんな目に遭わせたのだ。

それはシグリエル・リム・ロントが自分の立場を極めて正確に理解したからこそ、激しい嫌悪感だった。不快かつおぞましいのは自分の方だったのだ。思慮もなく軽率に声を上げた。その結果、見知らぬ少年が理不尽な暴力にさらされている。

「無事も何も、別に何もされてないわよ。……アム！ あなた無抵抗の相手を蹴り続ける趣味があるの!! いい加減になさい!」

「リエルが呼んだんじゃないか……だから、慌てて駆けて来たのに」

不満げに答えて、アムは打撃を止めた。

「ねえ、きみ、大丈夫かい?」

ミズリーが心配そうに少年へ声を掛ける。彼はリエルやアムが感じたような、異物への不快感を覚えなかったのだろう。

少年は丸めていた身体を解いて、ぎこちなく砂の上に座り込んだ。それから、ひどくつまらなそうに自分の身体を手でさすり始めた。骨折がないかを確認しているようだ。どうしてだか、アムやミズリーやリエルに対して、腹を立てている様子はない。

「おい、おまえ。質問に答えろよ。何してたんだ。

リエルのことを狙ってきたのか?」

「別に……ぶらぶら歩いてた、だけです」

アムの言葉に少年は素っ気なく答えて、後ろに立っているオーズへ視線を動かした。アムやミズリーには、ほとんど注意を払っていない。

「ここは立ち入りが制限されている場所ですか? 知らなかったですけど、何かの罪に?」

「いいや、特に立ち入りの制限はない。だから、何かの罪になったりはしない。まあ、国民はこのスシオル湖にはまず寄り付かないから、ここに誰かが来るのはとても珍しいのさ」

「オーズ! こいつの言うことを信じるのか!」

災難だったな、という調子のオーズに、アムはそう反応した。ここにやって来た少年が悪いのであって、事はそれ以上の話ではない、というふうだ。

「兄さん、それじゃあ彼は何だっというんだい? 彼を何だと思つたの?」

「それは……そうだな、もしかしてリエルを狙つて来たワルイヤツかも知れないじゃないか」

「そうなの?」

ミズリーの単純な問いに、少年は首を横に振る。

「違います。リエルが誰なのかも知らないし、あなたたちが誰かも知りません」

「知らないの？ ちなみに、ぼくはミズリウルという。それも知らない？」

「知りません」

「なあ、ぼうず。ちょっといいか？」 オーズが口を挟んだ。「おまえさん、この国の生まれじゃないな。最近越してきたのか？ 親は何をしている？」

「この国の生まれじゃないです。半年くらい前に越してきました。母は、貧民街の……ええと……ラルウ街区の娼館で働いています」

「娼婦の子供か！」

軽蔑したふうにあムは言ったが、少年の方は特に何の反応も見せなかった。怒るでもないし、怯えるでもない。ただ、うんざりしている。

「……あの、俺がここを歩いてたのが悪かったなら、謝ります。罪にならないにしても、二度とここには

来ません。だから、もう帰ってもいいですか？」

「ねえ、ちょっと、待ちなさいよ」

気付けばシグリエルは乱暴に水を掻き分けながら湖畔へ進んでいた。このままこの少年を帰らせてはならない、と激しく思った。

水から出て、素足でやわらかな砂を踏みしめ、少年の傍らに座り込んでまっすぐにその目を覗き込む。少年は目を逸らさなかった。深い黒色の瞳が、妖精姫を捉える。シグリエルはその瞳に浮かぶ色を正確に把握して、一度だけ吐息をついた。

どうにも、許せそうになかったからだ。

他人にとってただの不合理でしかないシグリエル・リム・ロントという存在が、だ。

自分はたった今、何の思慮もなく無自覚にこの少年を傷付けた。そしてこの少年は、そのことを怒るでも憤るでもなく、きつとただ呆れ果てている。

「ねえ、あなた。別に怒ったり罰を与えたりしないわ。誓ってもいい。だから正直に答えてくれる？」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。